

現代文・古典のつながりを考える「言語文化」授業研究

—現古漢の「美意識」の違いに着目する—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 一瀬大樹

1. 研究の背景と目的 —昨年度の研究を踏まえて—

昨年度「新開設科目「言語文化」に向けた現代文・古典のつながりを考える「読むこと」の授業研究」というテーマで研究を行った。背景にあるのは、高等学校で今年度（令和4年度）から実施されている新学習指導要領である。必修科目として「現代の国語」と「言語文化」が設定されており、特に「言語文化」では、現代文と古典を同じ科目内で扱うことになっている。従来の科目構成での授業のように、現代文・古典という区切りはなくなり、どのような授業を行うべきか、見当もつかない状態であった。自分自身が教師として経験した授業も、生徒として体験した授業も、どれも参考にすることはできない。それでも文部科学省がこのような変更を行ったのには必ず目的があるはずだと考え、授業改善に向けて取り組んだことが研究のきっかけである。

もちろん、科目名が変わっただけととらえ、今までと同じ授業を同じように行う、というのが最も簡単な解決方法である。しかし単純に古典の授業時間が削られるだけで、生徒の学び・進学に関する指導を考えると得策とは考えにくい。必ず科目の目的があり、それに応じて今の子どもたちに身に付けさせるべき力があるはずだと考え、研究を進めた。その中で大切だと思いついたのが「現代文と古典が同時に扱われていることを活かす」という観点である。「現代と古典の関わりやつながり」を生徒に考えさせる授業を構築することで、子どもたちに今の時代に必要な力を養い、新たな見方・考え方を広げることができるのではないかと考えた。そして昨年、「現・古の比べ読み」の授業を構築し、

研究として報告を作成した。

現代文と古典を同時に扱うことで、生徒たちは「今」と「昔」という時代の同質性や異質性に、「言葉を通して」気づくことができる。今自分たちが用いている言葉が昔とどのようにつながっているのか、どう変化しているのか、などに気づかせることで、生徒は新たな発見をし、視野を広げることが可能になる。また、古典だけを扱い、古典を自分たちから遠いものとして敬遠する「古典嫌い」の生徒を生み出さないことにもつなげることができる。今まで現代文というくくりで学習してきた文章や表現の特徴、古典として学習してきた古典常識・知識を比較することで、現代文だけではわからなかった「同質性」に気づき、現代文と古典の「深い」共通点を知ったり、現代と古典の異質性に気づき、違いや変化、そうなった理由をとらえたりする中で、今の発想にはない新たな見方に行きつくかもしれない。文章の比較を通して、時代や文化による見方、考え方のつながりを知り、自らの見方をより深くしたり、より広げたりすることができると考え、これこそが新たな科目に必要な授業であると思うに至った。

以下に昨年度の研究の概要を載せる。

・授業概要

第1次（1、2時間目）古×古

和歌三首（『古今和歌集』『新古今和歌集』）の比較を通して、300年を経てもつながる「月」に託した見方を読み取らせる。

第2次（3時間目）古×現

和歌（古典）と「山月記」（現代文）における「月」の表現に託されたつながりに気づかせる。

第3次（4時間目）現×古

「月」が表現された初見の小説教材（「月下の恋人」）を使用し、「月」の見方に関するつながりや違いをとらえさせる。

・分析結果

表1 授業に関する肯定・否定の割合

事前アンケート	
肯定的	55% (16人/29人)
否定的	59% (17人/29人)

↓

事後アンケート	
肯定的	87% (26人/30人)
否定的	13% (4人/30人)

授業に関して、生徒は概ね好意的にとらえており、「月」の表現を通して、現代と古典のつながりに気づき、見方・考え方を深め広げることができたという反応を得ることができた（詳細は令和3年度山梨大学教職大学院研究報告書参照）。

しかし、昨年度の研究を通して、次のような課題も発見された。

- ① 比べ読みの授業を定期的に行うため、「月」以外で対比できるテーマを見つける必要がある。
- ② 年間を通して、定期的にもしくは意図を持って現古漢のつながりに触れる授業を組む必要がある。
- ③ 「文章表現」と「自分自身の感じ方」のつながりを生徒に考えさせる必要がある。

特に③に関して、昨年は現代文と古文それぞれに表現された「月」を対比することで、「現代文」と「古文」のつながりを感じることができた生徒は多かった。しかし文章や表現を読んでいる生徒自身が、どのように月をとらえ、自分自身とどうつながっているのか、ということまでは考えさせることができなかつた。現代文や古文の表現のつながりを読む中で、自分自身の感じ方もそのつながりの中に組みこんで考える発問の工夫の必要性を感じた。

昨年度の研究を基に、この3点の課題の改善を中心として、更に新しい授業を構想することを今年度の研究の目的とした。

2. 研究の進め方 ー今年度の研究・実践の方向性ー

昨年度の研究から得た課題①～③に対応し、今年度は以下の①～③の観点で研究を進めることを考えた。

① 教科書の利用

昨年度の課題①にあるように「月」以外で表現を対比するテーマをどのように設定するか、まずは検討した。その際、誰もが比べ読みの授業を行えるよう、今年度使用する教科書の中から教材を組み合わせて授業を構築することを考えた。教科書の中で組み合わせを見つける視点を持つことで、教科書外の教材を用意することなく、比べ読みの授業を構築することができる。これにより、多くの先生方に取り組みやすい実践になるはずである。

教科書を分析・検討した結果、「秋」をテーマに授業を構築することとした。「秋の美しさ・美意識」という観点を設定することで、昨年度行った現・古の比べ読みに、漢文（漢詩）を新たに加えることができ、生徒の見方をさらに広げることができると考えた。

② 年間を通して生徒に現代文と古典を比べる視点を培うような工夫

課題②では、年間を通して生徒に現代文と古典を比べる視点を培う工夫が必要であると示した。そこで、今年度、現代文と古典を比べるような機会を定期的にするように努めた。ここでは2つの実践例を挙げる。1つは言語文化の導入部での『枕草子』の利用、もう1つは羅生門における「羅生門」と『今昔物語集』の比べ読みである。

4月には、「言語文化」の導入として、小・中学校でも学んでいる『枕草子』「春はあけぼの」を用いた。小・中の学習で内容はほぼ理解しているため、高校では「あなたは、それぞれの季節に最も合う時間帯としてどれを選ぶか」という問いを示し、作者の考える季節の感じ方と自分たちの季節の感じ方とを対比する機会とした。古典が遠い世界の出来事ではなく、現在と言葉を介してつながるということを感じさせ、自分たちとの同質性・異質

性を感じさせるきっかけとした（図1参照）。

また、定番教材である「羅生門」では、原典である『今昔物語集』との比較を行った。高等学校では定番の授業の一つであると認識しているが、展開が同じ物語が、現代と古典の描き方・表現の仕方ではどのように違いが出るのか、対比することで理解させる授業の一つである。今年度から高校1年生には1人1台PCが導入されており、ICT（Jamboard）を用いることで、周囲と意見の共有をしやすい実践を行った（図2参照）。

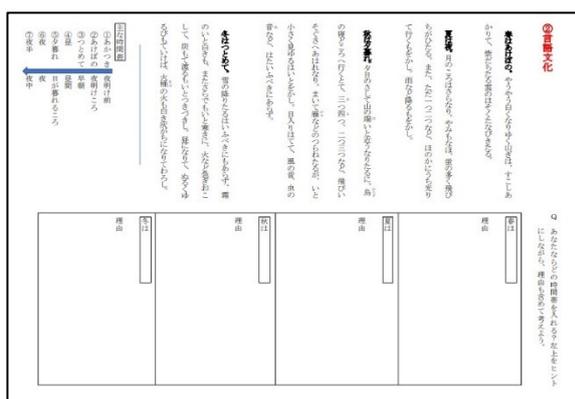


図1 『枕草子』ワークシート

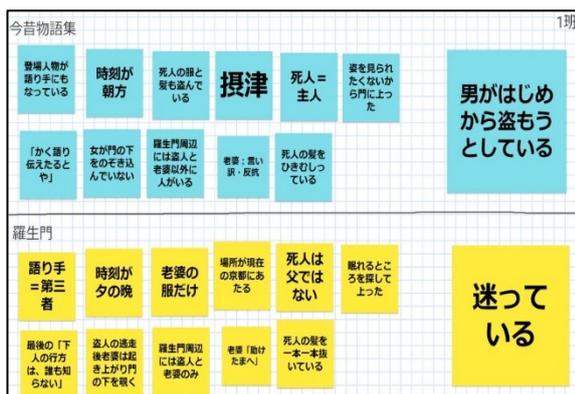


図2 「羅生門」Jamboardの例

③ 「表現」と「自分自身の感じ方」の対比

最後が課題③に対する改善である。昨年度は文章同士の「表現の違い」まで考えさせることはできたのだが、さらに深く「文章表現」を「生徒自身の感じ方」と対比して考えさせることができなかった。今年度は文章表現を自分自身の感じ方と対比し、自分自身の見方・考え方を客観的に省みることができるよう、ワークシート・発問等に工夫を加え、さらに深い研究につ

なげたいと考えた。

3. 授業実践

本年度計画した授業の実際を、以下の概要・全体計画・授業詳細にまとめる。

・概要

- (1) 対象校 山梨県立高等学校
- (2) 期間 2022年9月～10月 全6時間
- (3) 対象 1学年2クラス（79人）
- (4) 教材（言語文化・大修館書店）

- ・ 『徒然草』『をりふしの移り変わるこそ』 兼好法師
- ・ 「山行」杜牧
- ・ 「実体の美と状況の美」高階秀爾

(5) 単元名

「秋」の表現を通して、現代文・古文・漢文の「美しさ」に関する見方・感じ方・考え方のつながり・違いを理解しよう。

本単元の教材観、生徒観、指導観は以下の通りである。

① 教材観

今回は古文と漢文から「秋」を詠んだ文章を用いて授業を構成する。今年度から高等学校において新たな学習指導要領が実施されているが、大修館書店の言語文化の教科書を読みながら、季節に応じた読みを深めることが可能な教材が多く掲載されていることに気づいた。「秋」をテーマに書かれた古文と漢文を読み比べることにより、文化や時代の違いにより、どのように「秋」をとらえているのか、その共通点や相違点に気づくとともに、生徒自身が「秋」に関する見方・感じ方・考え方を広げることができると考えている。また、そこから現代の評論家による「美しさ」を考察した評論文へとつなげることで、生徒自身が感じている「秋を感じる美しさ」のとらえ方を相対化することができる。現古漢の教材を「秋」と「美しさ」で関連付けることで、文化や時代の異なる様々な文章に対し、生徒自身が自ら解釈を深めることができるようにしていきたいと考えている。

② 生徒観

もともと学問に対する興味関心の高い生徒

が多いが、授業中の発言や取り組みに関しては、生徒間での差が大きい。そのため、入学以来、積極的に話し合い、考えを伝え合う機会を設けることで、授業に主体的に取り組めるよう努めてきた。また古文・漢文に関しては、中学まで原典(本文)に触れることが少なく、現代語訳や書き下し文を通して内容を理解することが多かった。そのため、高校では古文の「単語」や漢文の「漢字」等、細かいニュアンスの違いを感じることができるよう授業を進めている。そのような中で古文・漢文を身近に感じ、生徒の実生活に近づけながら興味を持てるようにするため、季節に着目した取り組みを行っている。『枕草子』「春はあけぼの」や『徒然草』「をりふしの移り変わるこそ(春)」を学ぶ中で、現在の私たちの季節を感じる感覚は、古文の世界の人と比べてどのように違うのか、またどのような点が似ていたのか、など折に触れて考えを持つようにしている。今回の授業では、「秋」という授業実施の時期に合わせ、生徒が古文・漢文を通して自らの見方・感じ方・考え方を広げ、深く文章を読む力を培うようにしていきたいと考えている。

③ 指導観

「秋」は古くから日本人にとって特別な季節となっている。月や紅葉を愛でることで色彩の豊かさや美しさを感じ、少しずつ肌寒さが増すことに寂しさを感じる。現代に生きる我々も毎年、「〇〇の秋」というように秋になることを敏感にとらえて喜びを感じ、一方で徐々に木々の葉が落ち冬へと向かう様子に若干の切なさも感じている。今回の単元では、古典で描かれる「秋」を題材として取り上げ、「秋」に関して表現された古文と漢詩を読み比べ、比較して論じたり批評したりする活動を行う。またその後、「美」に対する感じ方に関連する評論文を読み、私たち日本人が漠然と感じている秋に対する認識や感情を、言語を通して明らかにしていく。文化・時代の異なる文章の中にある「言葉のつながり」を生徒に感じさせることで、生徒たち自身の見方・感じ方・考え方を深めることを目的としている。グループ活動や ICT などを取

り入れながら考えが深まるような授業にしていきたいと考えている。

・全体計画

第1次(1、2時間目) 古・漢

自分自身にとっての「秋」とはどのような季節かを確認した上で、古文(『徒然草』「をりふしの移り変わるこそ(秋)」)と漢詩(「山行」)の内容を理解する。

第2次(3、4時間目) 古×漢

徒然草と山行を比較し、「秋」の表現と「秋」の感じ方の共通点・相違点をとらえ、秋に対する見方・感じ方・考え方を豊かにする。

第3次(5、6時間目) 古漢×現

「美しさ」に関して考察した評論文「実体の美と状況の美」を読み、文化や時代による美しさのとらえ方の違いを知る中で、自分自身の秋に対する感じ方を相対的にとらえる。

・授業詳細

第1次(1、2時間目) 古・漢

まずは、2時間を使って古文『徒然草』「をりふしの移り変わるこそ(秋)」・杜牧の漢詩「山行」の内容を把握する。

『徒然草』からは、実りの秋というように、日本の秋の豊かさ、趣深さ、美しさを読み取ることができる。一方、「山行」は、日本と同じように秋の美しさ・趣深さが感じられる詩でありながら、「寒山」「霜葉」といった表現を中心にものさみしさも感じられる内容である。

以下に『徒然草』「をりふしの移り変わるこそ(秋)」・杜牧「山行」の本文を挙げる。

○『徒然草』「をりふしの移り変わるこそ(秋)」

- ・七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて来るころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、取り集めたることは秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。

○杜牧「山行」

- ・遠上寒山石径斜
白雲生処有人家
停車坐愛楓林晚
霜葉紅於二月花
遠く寒山に上れば石径斜めなり

白雲 生ずる処 人家有り
 車を停めて坐に愛す 楓林の晩
 霜葉は二月の花よりも紅なり

第2次 (3、4時間目) 古×漢

第2次では、生徒が第1次に行った内容の把握を基に、ワークシートを用いて古文・漢詩の対比を行う。

図3のワークシートを基に、グループごとに『徒然草』・「山行」それぞれの特徴を確認し、図4のようにJamboardを用いて話し合い、グループで考えを共有した。最終的には数班に発表させ、クラス内の考えを共有した。

結果として共通点よりも相違点を多く挙げているグループが多かった。どちらの表現にも「趣深さ」や「美しさ」は感じるものの、『徒然草』では秋の「豊かさ」を感じるのに、「山行」は「ものがなしい」「閑静」といった特徴を示すグループが目立った。生徒たちが、言葉や表現から日本・中国それぞれの文化を背負った「秋」の感じ方を読み取っていることが感じられた。また古文や漢文を単独で読むよりも、対比することでそれぞれの秋の表現の特徴に気づきやすくなっているのではないかと感じた。

それぞれの生徒が「秋」に関する日本と中国の文章表現をどのようにとらえるのか、相違点・共通点どちらに着目するのか、事前の予想は困難であり、授業展開も生徒の反応に応じて臨機応変に対応する必要があった。しかし、生徒たちが教員の説明を聞くのではなく、自ら考えて表現の特徴、文化の特徴に気づくことができ、昨年度と同様、現古漢の比べ読みを行う意味は十分に感じられた。

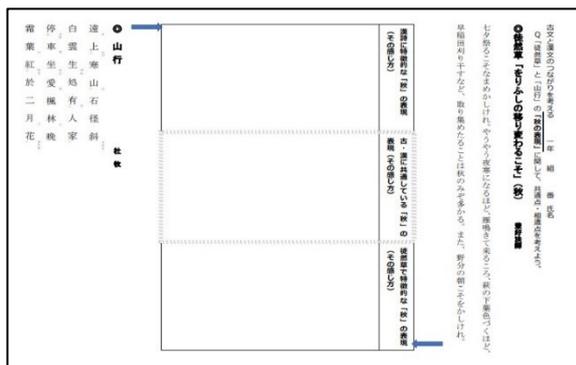


図3 第2次使用ワークシート

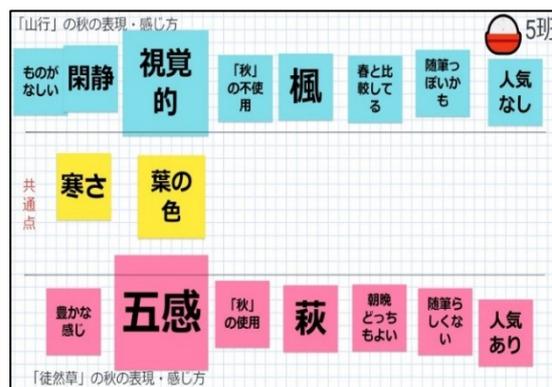


図4 第2次 Jamboard の例

第2次では、生徒たちの比べ読み・話し合いの後、教員から『徒然草』の続きの一文と宋玉「九弁」を紹介した。

- 『徒然草』「をりふしの移り変わるこそ」
 言ひ続ければ、みな「源氏物語」「枕草子」などにことふりにたれど、同じこと、また今さらに言はじともあらず。
- 宋玉「九弁」
 悲哉秋之為氣也
 蕭瑟兮草木搖落而變衰
 悲しいかな秋の気たるや
 蕭瑟として草木搖落して変衰す

この説明を通して、日本では、秋を「美りある趣深く美しい」と感じる感覚が古くから続くものであるということ、中国では、秋が「衰えや悲しみ」を感じる感覚が古くからあるということを理解させた。生徒たちが感じていた日本の「豊かさ」、中国の「ものがなしさ」に対し、古代から続く秋の見方、表現の特徴という裏付けを示すことで、生徒たちに、似ている表現であっても異なる文化によって生じていること、言語を通して表現の多様性があることを感じさせるようにした。

第3次 (5、6時間目) 古漢×現

第3次では高階秀爾の評論文「実体の美と状況の美」を用いて、生徒自身の「美しさ」に対するとらえ方を相対化する授業を実施する。

第2次で「秋」をテーマに日本と中国の文章を読み比べ、相違点があるということをつかませたが、第2次では日本と中国の作品の違いが際立って見えていたのに対し、新たに「欧米」

という更に広い視点を組み込むことで、違ったものが見えてくる。評論文では、次のように示される。

- ・ …西欧社会においては、(中略)「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるという考え方が強い。
- ・ …実体物として美を捉えるという考え方
↓
- ・ …日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、むしろどのような場面に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。
- ・ …「実体の美」に対して「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

このような筆者の考え方を基にすると、実は日本と中国の「美」に対する感じ方は、欧米に比べると近い見方であることが理解できる。文章表現とその背後にある文化を様々な距離感で見ることで、美のとらえ方に関連が見えてくるということをまずは生徒に理解させた。最終的には、生徒が自分自身の美意識を振り返り、西欧と日本の美意識、どちらに近い美意識を持っているかについて考えさせた。

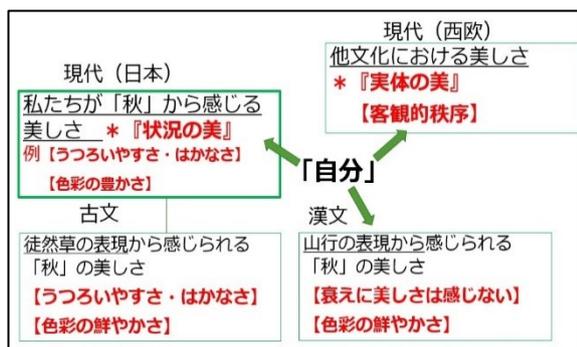


図5 第3次自分と各文化の美意識の対比

今回の授業実践を通して、生徒たちは、自分たちが日本に生まれ育つ中で何となく感じていた秋に対する趣深さは、「平安時代からのつながり」の上にあるのだと理解していた。同時に、漢詩の秋には、趣深さとともにものさみしさが表現されることが多く、それは中国では秋に「衰え・悲しみ」を感じる人が多いことに由来していることを理解した。日本と中国とでは秋に対する明確な違いがあると見出せてい

る。しかし、そこにひとたび西欧の見方を入れて考えていくと、「状況の美」という観点から、むしろ古文と漢文、日本と中国の美意識に多くの共通項が見られるということが浮き彫りになる。「文化が違えば秋に対する見方も変わる」ということを様々な観点から理解する機会となったと感じている。

最終的には秋に対する様々な見方を学ぶ中で、「自分の美意識はどこに位置しているのか」「どうしてそのように感じるのか」について、生徒それぞれが考え、自己を客観視し、見方・考え方を広げ深めることができたと確信している。

4. 分析結果・考察

以下の2つの資料をもとに分析を行った。

- ① 事前・事後アンケート
- ② ワークシート

・分析結果

まず、授業を行う前と後で、生徒の「秋に対する印象が変化したのか」という質問を比較した。結果は表2のとおりである。

表2 授業を受ける前と比べて秋に対する印象は変化したか?

変化した	42.7%	(32人/75人)
変化していない	57.3%	(43人/75人)

このアンケートからは、「変化した」と答えた人よりも「変化していない」と答えた人の方がやや多いという結果であった。生徒たちは授業を通じて様々な秋に対する見方を学びながらも、自分自身が小さいころから抱く「秋に対する見方」は変化しない人が多いという結果が示された。この質問項目だけでは授業の効果をはっきりと示すことはできなかった。しかし、この質問を通して見えたものがある。それは、生徒たちが、私が思った以上に自分たちの考える「秋」というものを明確に持っているということである。現代はどちらかというとも季節感が乏しく、特に高校生の年代では、秋を含めて季節の移り変わりや風物に対してあまり興味関心を抱いていないのではないかと予測していた。しかし、生徒の実態は私自身の想像とは異なり、

季節の変化を敏感にとらえていることが示されたことは驚きであった。

一方、この記述の内容を詳細に確認していく中で1つの傾向が見えてきた。

次に数名のアンケート意見を示す。

秋に対する見方が「変化した」人の記述

- ・ 山行で述べられていた「もの寂しさ」に共感した。自分が感じるもの寂しさは生き物の減少や花の減少があった。
- ・ 何に対して美しさを感じていたのか分からず何となく美しいというイメージだったけど、移ろいやすくはかないもの、状況の美であることが分かった。



秋に対する見方が「変化していない」人の記述

- ・ あまり変化していないが、自分が美しいと思うものを客観的に見つめられた（うつろいゆくもの、状況の美、季節感…）
- ・ 私が美しいと感じるのは、「日本の伝統的な美意識」であると感じた。

「変化している」と答えた人も「変化していない」と答えた人も、自分自身の秋に関する見方を客観的にとらえている記述が数多く見られた。

そこで、秋の印象が「変化した人」「変化しなかった人」という区別に関わらず、授業後のワークシートの記述（感想）を確認し直し、「自分の美意識を客観視する表現が示された人」がどれほどいるのか、分析した。結果は表3の通りである。

表3 授業後の質問から、自分の美意識を客観視する表現が示された人は？

示された	90.6%	(68人/75人)
------	-------	-----------

確認すると、全体の90.6%の人が自分の美意識を客観視した表現を示していた。以下に特徴的な生徒の表現を示す。

- ・ 自分の美意識は日本よりで、季節の移り変わり、自然の風景に美しさを感じていると思う。…自分には、建物だけでとらえられず、どうしても風景として考えてしまうところがあると感じた。

- ・ 自分はどちらかというと欧米の美意識に近いと感じた。…美しさをシンメトリーや実体に感じやすいが、空間や状況、アシンメトリーなどにも美しさを見出す必要があると感じた。
- ・ 私の美意識は、日本の伝統的な美意識にとっても近いと思う。…はかないものだったりなんとなくものがなしいものだったりをこんなにもきれいだと感じられるのは、多くの古典文学を読んだからだ。
- ・ 今までは当たり前のように状況の変化によって変わる美しさを感じたが、西欧にはそのような美意識があまりないのがわかった。

それぞれの生徒が自分の美意識は、「日本に近い」「西欧に近い」など考えた上で、建物単独よりも風景としてとらえる見方であったり、シンメトリーに美しさを感じる特性であったり、「古典文学を読んだから」と理由を考えたりと、自己の美意識を客観視することができていた。

もちろん、自分自身の美意識を客観視できず、現古漢それぞれの秋のとらえ方の違いで記述が止まってしまっている人も見受けられた。こちらも以下に記述を示す。

- ・ 日本以外のほとんどで、秋の落葉は衰えだったり、ハロウィンの怖いイメージだったり、秋に対してマイナスなイメージをもっていることに驚いた。
- ・ 今まで遠いものと考えていた中国の美意識も、西洋に比べると意外と似通った部分があると分かった。
- ・ 今まで自分が“当たり前”と思っていた美しさの感じ方・とらえ方は欧米とは全く違うということがこの授業を通して分かり、とても驚いた。

上述した通り、日本・中国・西欧の美意識の違いを示すだけにとどまり、自分自身の美意識がどれに近いのかという客観的な見方まで言及できていなかった。ただし、これらの生徒も、自身の美意識はとらえているが、明確な記述ができていないだけ、という人が多いと感じた。

個々に教員からフォローすることで、自らの秋に対する見方に言及できると実感している。

・考察と成果

まず何より大きかったのが、教科書を用いて、年間を通した計画の中で比べ読みの授業を実施することができたということである。昨年度の構想を今年度現場で活用する際、最も大切な視点の一つが、「誰もが行うことができる授業の実現」だと考えていた。教科書を用いて教材の扱い方を工夫することで、新たな授業の可能性を見出すことができたのは研究の大きな成果である。言語文化の一つの授業の在り方として今後の授業の参考として示していきたいと考えている。

また昨年度考えた「月」に加え、「秋」という比べ読みのテーマを設定できたこと、「美意識」という観点から現・古に加えて漢文も比べ読みとして取り入れることができたこと、生徒が様々な文化・時代による違いに気づき、様々な視点から思考する授業を構築することができたことも大きな成果である。

最後に、昨年度課題として残っていた、生徒自身が自己を客観視する機会を作ることができたことも重要な成果として挙げられる。複数の文章を比べ読みしながら、「自分自身の秋の見方、美意識について、客観視してとらえ直す」授業ができたことで、現代文・古文・漢文、それぞれの文章が、今の自分とどのように関わっているのか、どのようにつながっているのか、生徒が自分自身と向き合う時間を構築することができた。

生徒が古典を「遠い世界での出来事」あるいは「受験のための学習事項」と考えるのではなく、今の自分を形作るものとして、積極的かつ興味関心を深く抱きながら、「言葉を通して」学習できる実践とすることができたと感じている。文法や単語を中心に知識を教えるだけでなく、生徒自身が考え、見方・考え方を広げることができる授業として、高校生の国語・古典・言語に対する興味関心を広げるきっかけにしていきたい。

5. 今後の課題

2年間の研究を通し、言語文化の一つの授業方法を提案することができたということは、価値のあることであつたと感じている。ただし、2年間の研究では解消しきれていない課題もいくつかある。「言語文化」は高等学校で1年次に実施することの多い科目ということで、中学校との接続として適切な内容か、生徒の様子や実態を見ながら今後更なる授業改善を行うことが必要だろう。また、今回は自身の所属校での実践であつたため、進学を目指す生徒に向けた実践ということが主たる目的であつた。この授業をいかなる学力層の高校でも実践可能な授業とするにはどのような工夫が必要なのか、今後検討が必要になると考えている。

「言語文化」は新たな科目であり、まだまだ課題は多い。今後様々な授業方法が検討されるだろう。その中で、今回の研究が、今後の言語文化の授業や生徒の成長を考える一助になれば幸いである。

引用・参考文献等

- ・大滝一登 (2018) 『高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり理論編』, 明治書院
- ・大滝一登 (2019) 『高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり実践編』, 明治書院
- ・日本国語教育学会監修・町田守弘他 (2018) 『新科目編成とこれからの授業づくり』, 東洋館出版社
- ・文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』
- ・文部科学省 (2018) 『教育課程部会第 105 回配布資料』
- ・ユーザーローカル テキストマイニングツール <https://textmining.userlocal.jp/>
- ・小南一郎 (1973) 『楚辞』中国詩文選 6, 筑摩書房
- ・小南一郎 (2021) 『楚辞』, 岩波文庫

謝辞

最後に、2年間研究を行うにあたり、ご協力いただいた所属校・実習校の先生方、生徒の皆さん、またご指導いただいた教職大学院の先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。